内鮮青年に寄す[[1]](#footnote-1)

香山光郎

青年よ。君は内鮮一體の眞義を十分に認識して居られるか。内鮮一體がわが帝國にとつて、どれだけ重大な意義をもつかを、眞に認識してゐられるか。内地の青年諸君の中には、なに朝鮮位のものをと、高を括られるやうな人はないだらうか。半島青年諸君の中には、なるやうになるだらうと、受身的な心持でゐられるやうな者はないだろうか。萬一左様な、心掛けでゐるものがあるとすれば、それこそ由々しき大事である。なんとなれば、内鮮一體は、實にアジア新秩序の基點であるからだ。内鮮一體の實上がらずして、アジア諸民族の融合を望むことは出來ない。のみならず、今後の國防の見地から見て、内鮮一體は、實に生命線ともいふべきであるのだ。内鮮兩族が　陛下の軍人として國防線上に於いて一つになつてこそ、帝國の固基は泰山盤石の上に置かれるのだ。内鮮青年諸君は、この點について十分の認識をもつてゐられるのか。

まづ朝鮮青年の立場から見よう。君の一生――假りに今後約三十年間――は内鮮一體の事業のために捧げられなければならぬ。君の一生からは他のすべての個人のための、乃至家族のための利益や享樂や権利や、要求やを取り除いて、ひたむきに内鮮一體への奉仕を以つて諸君の一生を充たさねばならぬ。今から三十年後に完全なる内鮮一體の業を成就すべく、あらゆる努力、あらゆる犠牲を捧げつくす覺悟をなさねばならぬ。内鮮一體を完遂して、半島民衆をして代々皇國臣民としての光榮に浴せしめるやう努力することで、諸君の一生は捧げられなくてはならぬ。これこそは青年諸君の神聖なる義務であり、同時に上聖明に應へたてまつり下子孫のために盡[す]所以であると信ずる。

ところが、この事たるや決して半島青年のみによつて果さるべき性質のものではない。内地側の青年とがつちり調子を合せることによつて始めて、その成果を得べきであつてそれこそ車の兩輪の如く、楽器と彈奏者の如く、その中の一を缺けても用をなさないものである。

　内鮮一體は兩民族の歴史的宿命であり、　明治大帝の御遺謨であり、今上天皇陛下に於かせられては、是非ともこの鴻業を完遂したまふ大御心と拜せられる。朝鮮人の教育に於ける差別撤廢に見て然り、特別志願兵制度に見て然り、氏制度の創定に見て然り、これらのことは實に、半島の赤子を完全に皇民化させたまはんとのありがたき大御心の御現はれと拜察すべきであつて、從つて内地人にも半島人にも同時に、進むべき働きかけるべき方向を示させたまふものと拜察するのが當然だと思ふ。されば、萬一内鮮青年の無自覺、怠慢によつて、かゝる尊き皇猷に翼贊の誠を缺き、内鮮一體の成果をば、一世代遲延せしめる如きことにもならば、それこそ、臣子としておそれ多き極みと申さねばならない。のみならず國運の進展と、兩族の幸福がそれだけ沮まれることゝなる譯である。

青年よ、然らば、青年諸君は何をなすべきであるか。聰明なる諸君は、内鮮一體といふ歴史的に重且大なる皇謨を認識せられることにより、各々が演ずべき役割を自覺せられることゝ信ずる。この一つのことが同時[に]、　大君のため、御國のため、同胞のため、子孫のため、しかしてまたアジアのためにする一切の義務の基調となるものであるからである。かく諸君は他から示されることなくして、自分の進路を發見することであらうが、假りに二三の具體的な順序を述べるとしよう。

内地の青年よ、君はまづ朝鮮及び朝鮮人を知れ。朝鮮に關する書籍を讀み、そして朝鮮人に友人を作れ、多勢の友人が出來ればそれに越したことはないが、一人の友人でも結構だと思ふ。その一人の朝鮮人の友人の心を知り、同時に君の心をその一人の朝鮮人に打明けて知らせよ。朝鮮人の青年に對しても同じことが云へる。これにはお互に多少の努力と犠牲を要する。永い間違つた歴史や風習の中に育つた者同であるから、始めの中にはちとぎごちないところもあり、誤解し易い點もあり、往々不愉快な感情を伴ふ點もあらう。しかし永い間辛抱強くつきあつてゐる中には、おのづと、各々[[2]](#footnote-2)相手の中に自分を見出すことであらう。「あゝさうだつたか。分つて見れば同じ心を持つた兄弟であつたんだね」と喜びの叫を發するに違ひない。一對のかゝる友人が出來れば内鮮一體の力強い綱が一本出來たわげで、かゝる綱が一本一本と殖えるに從つて[、]數千數萬のこれらの綱を通じて神經と血液が通ひ合つて、つひに内鮮一億の同胞が一心一體に固まるのである。この個人的接觸と結合こそは内鮮一體の基礎工事であり、同事に主工事であり、また仕上げ工事でもあるのであつて、これなくしては百の宣傅も呼掛も結局空念佛に終るに違ひないのだ。

次ぎに半島側の青年としては自己の皇民化的改造にいそしむべきである。よく日本精紳を研究し、それを自分の精紳とするやう日常努力することである。それにはまづ國語を完全に學習して眞の母語になるやう努力し、神社參拜、その他の禮儀作法に慣れるやうにこれを習得し、身體も心も生粹の日本人になり切るやう毎日、時々刻々修行しなければならない。かやうに自分一人を完全な、模範的な、日本人にすることは自分一人の分内のことであるから、これが出來ないといふことはない筈である。半島青年よ、君に取つてこのことこそは、生命よりも大事なことなのだ。大君のための最大の義務にして、同時に二千四百萬朝鮮同胞やその萬代の子孫のための神聖な義務なのだ。

最後に、朝鮮青年よ。君は特別志願兵に出でよ。志願兵に出られない事情といふものは一つしかないのだ[[3]](#footnote-3)。それは病弱といふことだけである。それ以外の事情とは、決して事情ではないのだ。だから病弱者を除いては全部特別志願兵に志願せよ。朝鮮の壯丁が全部兵役の義務を果す日にこそ、朝鮮に皇民北完遂の光榮は來るのだ。そして不幸にして志願兵義務[よ]り漏れた場合、君は或は防護團員として、或は愛國班員として、如何なる職業にあるを問はず、その職を通して、御國のために盡すことを、銃を取つて前線に立つた覺悟でせよ。かくすることは、君自身と、君の家と、君の同胞に幸福と光榮を齎す、唯一の道なることを牢記[[4]](#footnote-4)せよ。

青年よ。帝國の前途は光明に充ちてゐるのだ。わが日本は今や世界の指導者たるの目標に向つて堂々と[邁]進[[5]](#footnote-5)してゐるのだ。諸君の汗と血とは一滴も無駄にされることはなくして永遠の光の源となるのだ。かゝる榮ある國、かくも希望輝く聖代に生まれ合はせることは誠に稀有のことであらう。内鮮の青年よ、千載一遇の諸君の生の春を壽がうではないか。　　　　　　　　　　　　　　（筆者の舊名　李光洙）（『總動員』1940年7月）

1. 『總動員』1940年9月号に掲載され、1941年1月20日博文書館発行の『同胞に寄す』に収録された。 [↑](#footnote-ref-1)
2. 「各々」は『同胞に寄す』で「お互に」に修正されている。 [↑](#footnote-ref-2)
3. 「ないのだ」は『同胞に寄す』で「ない筈だ」に修正されている。 [↑](#footnote-ref-3)
4. 「牢記」は『同胞に寄す』で「銘記」に修正されている。 [↑](#footnote-ref-4)
5. 原文は空白。『同胞に寄す』で修正されている。 [↑](#footnote-ref-5)